博士号請求論文審査要旨及び担当者
報告番号　甲　乙　第　　号　　氏名　　山根亮一
論文審査担当者
主査　慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授　　巽　孝之
　　文学研究科委員、Ph.D.
副査　東京大学名誉教授　　林文代　Ph.D.
副査　ACLS（米国学術会議）/　SSRC（米国社会科学研究評議会）/　NEH（全米人文科学基金）国際地域研究員 /ヴァージニア人文科学財団所属
　　メアリ・ナイトン　(Mary A. Knighton) ,　Ph.D.

論文題目
　　“Cosmos and Cosmopolitanism: Vehicles for William Faulkner's American South” (コスモスとコスモポリタニズム―ウィリアム・ フォークナーのアメリカ南部)

山根亮一君の本論文は、旧来アメリカ深南部に根ざす地域的小宇宙（コスモス）として評価されることの多かった 20 世紀作家 William Faulkner（1897-1962）の作品群を、ポスト植民地主義および新自由主義の視点をも咀嚼した 21 世紀的コスモポリタニズムの視座より再吟味し、ローカルにしてグローバルな逆説的想像力の本質に迫ろうとする、意欲的なものである。

この構想を実現するために、山根君は我が国の作家・中上健次が Faulkner 文学のうちに洞察した「繁茂する交通機関」（overgrown transportation）なる評言をヒントに、そこではいかに文字どおり乗り物としての交通機関（vehicle）と修辞的水準における隠喩の媒体（vehicle)とが交錯しているか、その結果、いかに「ある地域に根差しながらも移動する主体」という両義的存在が表象されているかを分析し、堅固な理論に基づく独創的な研究を完成した。

論文全体は、序章と結論を含め 7 章構成。

Introduction
Chapter 1: Echoes of Silence: Old Bayard's Disability Aesthetics
Chapter 2: "Dar Mr Jason car": Persons in Transition in *The Sound and the Fury*
Chapter 3: "A Body Does Get Around": The Long 1920s of the Southern U.S., or, Nativist Modernism in *Light in August*
Chapter 4: Look at the Sky: Homemade Cosmopolitanism in *Pylon*
Chapter 5: "The Jim Bonds": The Vehicle of Atlantic Modernity in *Absalom, Absalom!*
Conclusion
Notes
Works Cited

論文の概要

20 世紀アメリカ文学史の中で、南部作家 William Faulkner ほど地域主義の視点から世界的に受容されてきた者はおそらくいないだろう。彼より一世代前の地域主義作家 Sherwood Anderson から、故郷であるアメリカ深南部はミシシッピー州を題材として小説を書くことを勧められた Faulkner は、その後その場所と歴史を、無尽蔵な美学的源泉と認識するようになる。1949 年にノーベル文学賞作家となった彼がその輝かしいキャリアを振り返る頃には、自らの作品群を「私の小宇宙 (“a cosmos of my own”)」と呼び、その中で彼が構築した虚構の共同体「ヨクナパトーファ郡 (Yoknapatawpha County)」は、彼の地域主義を濃密に表現するための舞台となった。そして 1962 年に彼がこの世を去ってから半世紀が経つ間に、「小宇宙」は驚くほど広範囲に伝播した。フランスでの Faulkner 人気を決定的にした Jean-Paul Sartre の評価により本国アメリカでも正当に位置づけられるに至った Faulkner が、やがて南米の Gabriel José García Márquez,や Édouard Glissant, そしてインドの Salman Rushdie らグローバルな水準で文学的影響を及ぼしたことは、すでによく知られている。

このように確立された Faulkner 像を 21 世紀的な視点から再構築するために、山根君はまず David Harvey の *Cosmopolitanism and the Geographies of Freedom* (2009)を補助線とする。Harvey は、Immanuel Kant のコスモポリタニズムの基盤となる地理学と人類学に焦点をあてながら、ネオリベラリズム的なグローバル社会に対する批判を展開し、ローカルでグローバルな声を増幅させようと試みた。さらに我が国の作家・中上健次が Faulkner 独自の時空間であるヨクナパトーファ郡の地図——それは 1936 年の小説『アブサロム、アブサロム！ (*Absalom, Absalom!*) 』で初めて地図化された——をめぐって、その図面上に広がる鉄道から拡散する様々な乗り物（馬車、自動車など）に想いを馳せ、「繁茂する交通機関」と呼んだことも大きなヒントとなる。「繁茂する交通機関」ほど巧みにアメリカ南部人のポリフォニーを反映した概念はないからだ。英語では、メタファーを構成する二つの要素を tenor と vehicle と呼ぶが（“Life is journey”という文の場合、tenor が“life”、vehicle が“journey”となる）、「繁茂する交通機関」（overgrown transportation）なる概念では交通機関そのものに vehicle の役割が想定され、Faulkner の描く南部人の声を代弁している。それはある地域に根差しながらも移動する主体、すなわちローカルでありながらグローバルにもならざるをえない複合的な主体の両価性を指し示す。

このような視点より、山根君は南部作家 Faulkner の地域主義をより普遍的な視点から再考するべく、メタファーが「ローカル」と「グローバル」との間を移動していく歩みを丹念に追跡する。そして、彼の 5 つの小説がそれぞれの仕方で、作品内の様々な交通機関とその乗組員（又はそれを描写する登場人物）たちのあいだに共振関係を結んでいることを例証する。Faulkner 文学では乗り物によって様々な主体位置にある登場人物の声が代弁されているからだ。彼の「コスモス」における輸送メディアと言語メディアの同化、又は、交通機関と

メタファーとしての多義的な vehicle に注目することは、Faulkner の地域主義を内部から脱構築しながら、結果として、彼の「コスモポリタニズム」を照射することに繋がるだろう。

かくして、この方法論を得た山根君は、第一章で扱うヨクナパトーファ・サーガの始まりである小説 *Sartoris* (1929)や、第二章で焦点を絞る 20 世紀モダニズム文学の金字塔 *The Sound and the Fury* (1929) の分析では世代間や兄弟間を繋げる血族的な共同体に注目し、第三章で分析する多民族混淆の悲劇を物語る *Light in August* (1932)では深南部という人種主義的な地域の共同体に照準を定め、第四章で考察する 曲芸飛行士たちの物語 *Pylon* (1935) では反対に地域性の曖昧化されたニュー・オーリーンズを舞台とした共同体を浮き彫りにし、さらには最終章の第五章で検討する最高傑作 *Absalom, Absalom!* (1936)では奴隷貿易の記憶を通じて広がる全世界的な共同体（*Absalom*）のすがたをつまびらかにしていく。自動車から飛行機まで様々な交通機関を提示する 5 つの小説は、お互いの欠落を補い合いながら、Faulkner が「コスモス」と呼んだアメリカ南部と、その場所に内在するコスモポリタニズムの可能性を示す。その結果、山根君は Faulkner における「コスモス」とはつまり、「ローカル」と「グローバル」とを両価的に表現し、同時にデラシネ的な人間の存在不安を喚起させる物語形式でもあるのを証明する。きわめて個人的に見える家族や地域も、それらが世界的な奴隷貿易の記憶と不可分なアメリカ深南部に根差す以上、その地域的枠組みから逸脱せざるを得ないとするなら、まさにその視角より Faulkner の語り手としての主体位置とその分裂を検証することには、一定の意義があろう。本論文はこれら 5 つの作品群を通してそうしたプロセスを段階的に示すことで、地域から世界を、世界から地域を見つめ直すためにたえまなく移動を続ける主体位置を確認する。

審査の要旨

山根亮一君の博士論文“Cosmos and Cosmopolitanism: Vehicles for William Faulkner's American South”は、北米のモダニズム文学の代表格にして、いまでは南米から東洋にまでおよぶグローバルな影響力から世界文学的な作家と目される南部作家 William Faulkner の文学から 5 つの代表作を選び出し、それらに画期的な解釈を加えたものである。この研究を実現するために、彼は昨今のポストコロニアリズム理論やネオリベラリズム批判の成果をふまえて独自の“vehicle”の理論、すなわちあくまで隠喩的な「修辞」としての “vehicle”ともに文字どおり「交通機関」としての“vehicle”が相互影響し合う可能性から Faulkner 文学を読み直すというきわめて独創的な理論を編み出した。その方向性が早くから学会でも注目を浴びていたことは、厳格な査読制度をもつ日本アメリカ文学会の機関誌『アメリカ文学研究』の英文号 *The Journal of the American Literature Society of Japan* 第 10 号（ 2012 年）に掲載された本論文第二章の原型論文 "'Dar Mr Jason car': Persons in Transition in *The Sound and the Fury*"が、第２回日本アメリカ文学会新人賞の受賞作に選ばれたことからも窺われよう。選考委員会による選評はこう綴られている。

「山根氏の Faulkner 論は、比喩における『媒体』としての vehicle を『乗り物』に結びつけるとおいう議論設定からして意表を衝く。ここには、たとえば『文学作品に現れる自動車』といったありきたりの切り口ではなく、キャラクター批評とレトリック分析が意外な場所で接点を持つという、新鮮な驚きがある。作品の精読に徹しつつ、読書をスリリングな読解へと誘う魅力的な文章である」（『アメリカ文学研究』 48 号 [2012 年 3 月] 70 頁）。

したがって、審査委員会一同も大きな期待をもって山根君の博士号請求論文を熟読し、 2014 年 5 月 17 日（土曜日）午後 1 時より、慶應義塾大学三田キャンパス研究室棟において、口頭試問に臨んだ。

基本的に、ここにまとめられた博士号請求論文に対する第一印象は、上記の新人賞選考委員会とほぼ変わらないというのが、審査委員会の共通した感想である。山根君の論文が、 Faulkner が自身の文学世界について語った言葉をもとに、Faulkner 文学の一つの重要な側面を切り開こうとする意欲的な論文であること、その長所の一端が、Faulkner における「コスモス」とコスモポリタニズムの関係を語るのに、“vehicle” の二つの意味/働き（即ち「乗り物」というリテラルなものと「隠喩の媒体」というフィギュラティヴなもの）の相互作用に着目した戦略にあることについて、審査委員一同は深く納得している。とくに *Sartoris* における Old Bayard の deafness について分析した第一章や新人賞論文を発展させた第二章のみならず、山根君が四年前、日本マーク・トウェイン協会が発行する国際英文誌 *Mark Twain Studies* 第 3 号（ 2010）の小特集 “Twain and Faulkner”に投稿し厳正な審査を経て発表に至った英語論文 “Mechanical Syndrome: Twain, Faulkner, and a Shift in the U.S. Typesetting”が第四章における *Pylon* 研究において飛躍的な発展を見せている点で、その研究者としての成長に感嘆する声もあった。 Faulkner 自身が飛行機のみならずさまざまな乗り物を愛したことはその伝記や書簡などから窺い知られるわけであるから、ここには山根君が将来さらに視野を拡大していく余地が耕されている。結果的に、 Faulkner の 5 作の小説の詳細なテクスト分析を行いながらも、Faulkner 研究、文学研究の枠にとらわれず、Homi Bhabha, David Harvey, Fredric Jameson, Tobin Siebers, Werner Sollors ら現代を代表する文学批評家、文化理論家の著作も参照し、スケールの大きな議論を展開していることはきわめて高く評価された。

もちろん、全体として労作ながら、野心作の常として、ここにはリスクも潜んでおり、口頭試問ではまさにその点から、いくつかの問題点や疑問点も提出された。スペリングやビブリオグラフィー書式の単純ミスや事実誤認については修正可能だが、博士号請求論文の全体に関わる重大な問題点としては、たとえばテーマとの関連において、あくまで vehicle を修辞と交通機関の両義性で再定義するならば、それならいったいなぜもうひとつの代表長篇と呼ばれる *As I lay Dying*（1930）や *Sanctuary*（1931）が扱われないのかということだ。この限界については、山根君本人も充分に認識しているところであり、いずれ両作品をも積極的に組み込んで行く構想を述べるに至った。

また、 Faulkner とモダニズムについてはすでに多くの研究があるが、そうした研究史の文脈において、画期的な方法論を編み出した本論文の特性がいかに

位置づけられるのかを問う向きもあった。とりわけ、“vehicle”が修辞としても交通機関としても有効な切り口になるのなら、それは Faulkner の同時代作家たち、たとえば Willa Cather や F. Scott Fitzgerald のような花形作家たちにも適用可能なのか、だとすればこの方法論自体がモダニズム文学全体を再検討する理論になりうるのかどうかは、山根君が必ずしも明確にはしていないだけに、今後の研鑽を待ち望む。

各論では、たとえば第二章の *The Sound and the Fury* 論において 自動車と切り離しては考えられない Jason Compson の存在を人間機械共生系にたとえるなら（79）、カリフォルニア大学ロサンジェルス校教授 Mark Seltzer による名著 *Bodies and Machines* (1994)の理論を援用すれば、さらに鋭角的な分析が期待できたはずだという指摘がなされた。また第四章の *Pylon* 論において、地域性を問題にしながらも Ohio と New Valois があまり違わないかのように処理している点（151）は強い批判を受けた。“Ohio”は実在の 中西部の州 Ohio だが、“New Valois”は Faulkner が 深南部都市 New Orleans をもとに創造した架空の町であるのだから、その地域差は決定的というほかない。さらに結論部において、Faulkner の饒舌な文体を "talkative"と形容しているが（201）、個人としての Faulkner は——特に 1949 年のノーベル賞受賞以前は——マスコミ嫌いで世間との接触を避ける傾向が強かったから、作家自身と文学作品を明確に区別しておかない限り、この形容詞の選択は誤解を招きやすいだろう。

とはいえ、 20 世紀の古典とも言うべきテクストであり、先行研究の層もアメリカ文学においては例外的に部厚い Faulkner が相手であることを考えれば、ここに 21 世紀のコンテクストを得たからこそ説得力にあふれる新たな方法論が提起されたことは、まぎれもない事実である。仮に山根君が以上に審査委員会が指摘した問題点を克服し、独自の“vehicle”の理論をより深い水準で作品精読へ応用し、この博士号請求論文を根本的に再構築して一冊の単著をまとめあげる機会を得られるならば、それは国際的にも有望な新しい Faulkner 学者、新しいアメリカ文学研究者の誕生を意味しよう。その第一歩として、審査員一同は山根亮一君の博士号請求論文の画期的意義を評価するものである。

20 14 年 6 月 30 日